

## < 2 実践事例 >

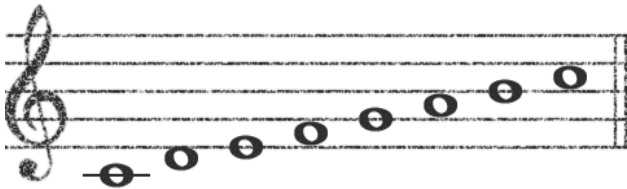
### 1 題材名 「聴いて、叩いて、重ねてつくろう！」 (第2学年) 一身のまわりのもので奏でるガムラン風の打楽器合奏—

#### 2 題材観

##### (1) 音楽の世界をもっと広げよう！

世界には様々な音楽が存在します。クラシック音楽、ポピュラー音楽、民族音楽などといった区分けを耳にしますが、それらの言葉だけでは表現しきれない程に、様々な音楽が各々に固有の特徴をもっており、音楽の多様性には驚かされます。

その一方で、私たちが普段の生活の中で耳にする音楽は、西洋音楽の影響を受けているものが多いように思います。それは、もちろん西洋音楽の特徴を一概に言い表すことはできませんが、叙情的な性格をもつ旋律が歌われているものであったり、コード進行を伴うものであったりする音楽が目立つからです。また、ヴァイオリンやトランペットなどといったオーケストラで用いられる楽器が登場する音楽もよく耳にします。いずれにしても、西洋音楽の影響を受けたものが多いのは、西洋音楽が汎用性の高い構造をもっているからでしょう。このことは、西洋音楽発祥の五線譜が多くを音楽を記録するのに大変役に立っていることからもうかがえます。



しかし、西洋音楽や西洋音楽の影響を受けた音楽も、そうでない音楽も、世界にある様々な音楽のうちの一つです。そこには音楽的な共通点があり、尊重すべき独自の音楽的な要素もあります。

共通点の一つに、繰り返しや組み合わせからつくられていることが挙げられます。音楽は複雑に組み立てられているように思われがちですが、その構造は実はシンプルな一つの型を繰り返している、それをつなげてできていることが多いのです。ただし、西洋音楽ではその一つを繰り返すときに、調を変えたり動機を变形させたりして、変化に富んだ表情豊かな表現を生み出しているのです。

現代音楽のミニマル・ミュージックも、繰り返しや組み合わせでできている代表的な例です。一つのフレーズの繰り返しでも、他のフレーズを組み合わせることによって、複雑に聞こえてくる場合があります。そのミニマル・ミュージックは、アフリカやアジアの民族音楽の影響を受けていて、民族音楽にもこうした単純な繰り返しの構造をも

ったものがたくさんあります。

以上のように、繰り返しや組み合わせでできている原理は、西洋音楽も現代音楽も民族音楽も、何ら変わりはありません。

その一方で、音楽には各地域の環境や気候、生活様式、信仰などとの結びつきから、それぞれに独自の発展を遂げてきた面もあります。民族音楽の中には、西洋音楽ではあまり価値があるとされてこなかった音楽的な要素に価値を見いだしてきたものもあります。そういった音楽の違いにふれることは、それぞれの音楽がもつ独自性のおもしろさを感じ取り、その尊さに気づき、より多くの音楽に関心を寄せていくきっかけを与えてくれます。

様々な音楽に、繰り返しや組み合わせからできていることをはじめとする共通点があることに気づき、そのことにおもしろさを見だし、共通点を味わいながらそれぞれの音楽を楽しめたときに、音楽の楽しみ方は広がるでしょう。また、それぞれの音楽に独自の音楽的な特徴があることに気づき、それぞれの特徴に価値やおもしろさを見だし、独自の特徴を味わいながら様々な音楽を楽しめたときにも、音楽の楽しみ方は広がるでしょう。

本題材で扱うガムランは、インドネシアの伝統的な民族音楽です。その独自性を味わいながらガムランを鑑賞したり、ガムランの音楽構造を手がかりに合奏を創作したりすることは、音楽の世界を広げるきっかけになると言えるでしょう。

##### (2) ガムランってなあに！？

ガムランとは、単体の楽器ではなく、ゴングなどの銅鑼類や青銅琴などの鍵板楽器類による旋律打楽器の大合奏のことです。東南アジアの器楽合奏の中で最も大がかりなものです。



## ①ガムランのルーツ

インドネシアの芸術は、ドンソン文化（紀元前4世紀ごろベトナム北部に発生した青銅器文化）によって紀元前後までにもたらされた稲作農耕文化に基づいています。そして、祖先崇拜や精神信仰と



いった慣習の伝統を保ちながら、外来文化の受け入れを通じて展開されてきました。

ガムランは、中部ジャワ、西ジャワ、バリをはじめ、村々の小規模なものまで様々です。上演芸能の一端として、王宮の儀式を担う要素の一つとして、あるいは一般の人々の日常生活や宗教儀礼とのかかわりの中で、ガムランはそれぞれの地域ごとに発達してきました。

例えばバリ島では、バリ＝ヒンドゥ（インド伝来のヒンドゥ教と地元のアニミズムが合体・混交した独自のヒンドゥ教）が各種儀礼の中でそれぞれに対応する芸能を発達させてきました。それらは、上演すること自体が既に儀式であるとされるきわめて儀礼性の高いものから、儀礼に参加する信徒の娯楽として供される芸能まで、様々なレベルのものが存在します。バリのガムランは、芸能も供物と同じ物であるとされる中で発展してきました。

## ②ガムランに用いられる楽器

ガムランには、主に青銅製打楽器が用いられます。また、ガムランに用いられる旋律打楽器の発音部分（叩いて音を出すときに振動する部分）の素材は、ほとんどが青銅か竹でできています。青銅も竹も、インドネシアの人々の暮らしと密接に結びついた素材です。青銅は、農耕儀礼にかかわる「法器」、つまり宗教上の道具として用いられてきました。竹は、インドネシアでは家の建築材料や日用品の素材としてもきわめて一般的なものです。一般の人でも手軽に加工できるため、庶民的でプライベートな素材と言えます。



青銅製打楽器は、楽器の形や音楽の中での役割の区別によって、次のように分かります。

青銅製打楽器	ア 銅鑼類	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゴング属</li> <li>ボナン属</li> </ul>
	イ 鍵盤楽器類	<ul style="list-style-type: none"> <li>グンデル属</li> <li>サロン属</li> </ul>

### ア 銅鑼類

銅鑼類の楽器は、ゴング属とボナン属に分かれます。どちらも表面にコブのある銅鑼ですが、曲を演奏するときの役割の違いで区別されます。

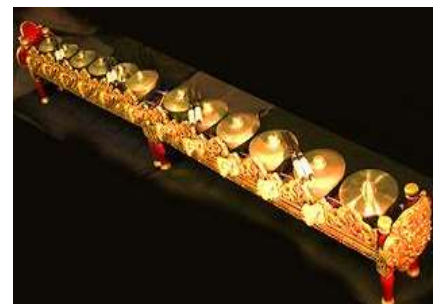


ゴング属の楽器（上の写真）は、ガムランの音楽形式の基本である拍節周期（後述）を示すために、一定間隔で鳴らされる銅鑼類のことで

す。ゴング属で最も大きな楽器がゴンアグンです。巨大な銅鑼が棹に吊るされたもので、日本の梵鐘にも似た深い響きがします。ゴンアグンは曲の最初と最後、そして重要な節目となる拍で打たれます。

ゴンアグンの拍と拍の間で定期的に叩かれるのが、小型のゴング属です。棹に吊るされたものと平置きのものがあります。クンプルはゴンアグンと同様に棹に吊るされており、2～3番目に大きなゴングです。それに対して、クノンやクトツなどは、平置き鍋型コブ付きゴングです。

ボナン属の楽器は、基本旋律に装飾を加えて旋律を演奏したり、リズム的なアクセントを受け持ったりします。また、前奏を担当することも多いです。ゴング属よりもやや小型の銅鑼が12～14個一組で音階順に木枠に並べて平置きされています。代表的なものにレオン（右の写真）があります。



## イ 鍵板楽器類

鍵板楽器類は、基本旋律を奏でたり、ボナン属と同様に基本旋律に装飾を加えて旋律を演奏したりします。鍵板楽器類は、グンデル属とサロン属に分けられます。

グンデル属は、鍵板をひもで吊って木枠の上に固定し、各鍵板の真下に竹筒を並べて共鳴筒にした構造の楽器で、ヴィブラフォンの先祖と言えるでしょう。代表的なものにウガル（下の写真）があります。



一方、サロン属とは、鍵板をひもで吊らずに直に木枠の上に置いたものをいいます。青銅の鍵板が空洞のある木の台の上に並べられ、木槌や水牛の角によるバチで叩くため、金属的な力強い響きがします。

## ウ その他

青銅製打楽器の他にも、多様な楽器が使われます。水牛の皮による二面の締め太鼓であるクندان（右の写真）は、奏



法の違いで曲の構造や速度を示す指揮者のような役割を果たし、装飾も加えます。小型のシンバルであるチェン・チェン（右の写真）は、リズムを刻み、華やかさやアクセントを演出します。他に、細かな装飾を加えていく竹笛スリンなどもあります。



## ③ガムランの楽曲構造

ガムランでは、前述の青銅製打楽器の分類からもわかるように、使用される楽器それぞれにリズム、旋律上の役割分担があります。楽器の役割分担は、ガムランの楽曲構造の特徴そのものを反映しているのです。

## ア リズム面について

ガムランにおいて最も重要な要素の一つが、拍節周期です。これは、あるリズム構造の繰り返しによって生まれます。

## (7) 拍節周期

ガムラン音楽では、一定の拍数を一周期として、その中を細かいリズムで区切り、それが繰り返されています。このリズムの区切りを全てゴング属が演奏します。拍節周期の中でそれぞれに異なった一定間隔で鳴り、リズム構造ができます。

拍節周期の一周期は4拍の倍数で、最低8拍から16、32、64、128拍で、最長のもので256拍です。周期の区切りに鳴らされるのが、最も大きなゴング属であるゴンアグンです。一周期の最後の拍でゴンアグンが鳴らされます。

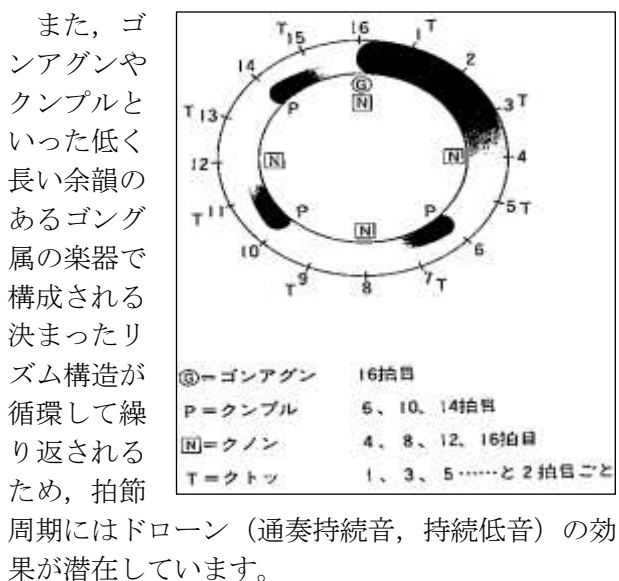
ゴンアグンから次のゴンアグンまでの拍の間隔はゴンガンと呼ばれ、ゴンガンが楽曲中何度も繰り返されます。他のゴング属は、ゴンガンの中を区切るようにして、それぞれ一定の拍数ごとに鳴らされます。

## (イ) リズム構造の例

ガムランには、1ゴンガンの拍数や区切り方の種類によって、いくつかのリズム構造があります。例えば、16拍周期になっているものには、次のようなリズム構造のものがあります。

- 16拍目（ゴンガンの区切りの拍）にゴンアグンが鳴らされます。これが最も重要な拍です。
- ゴンガンを4拍ごとに区切って、4、8、12、16拍目にクノンが鳴らされます。
- 同じく4拍ごとの区切りですが、6拍、10拍、14拍目にクンプルが鳴らされます。
- ゴンガンを最も細かく2拍ごとに区切って、クトツが鳴らされます。

このように、複数のゴング属の楽器がそれぞれ一定の間隔で拍の区切りをつけています。この一周期を円で表すと、下の図のようになります。



**(ウ) 後ろの拍が重くなる拍の流れ**

ガムラン音楽は、拍の流れを伴う音楽です。そして、強拍と弱拍が規則的に繰り返されるため、拍子が生まれます。ゴンアグンが一周期の最後の拍で鳴らされることからわかるように、ガムランでは4拍目が特に強調して感じられる拍になり、1拍目と3拍目が弱拍になります。後ろの拍が重く、最後が強拍となるのです。

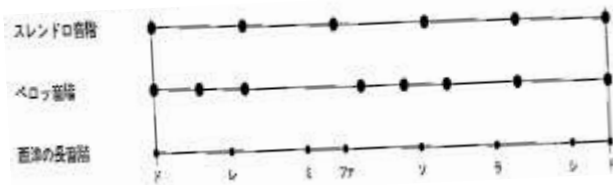
**イ 旋律面について**

ガムランは打楽器に旋律的能力をもたせて行われます。旋律面では次のような特徴が見られます。

**(ア) ガムランに用いられる音階やその調律**

ガムランには、二種類の音階があります。しかし、それらは西洋の音楽の長音階や短音階とは全く異なります。

一つは、1オクターヴをほぼ平均的に五音に分割した五音音階（スレンドロ音階）、もう一つは、1オクターヴを異なる間隔で七分して、その中の五音を用いる音階（ペログ音階）です。慣れないうちは音律が「ずれて」いるように聞こえますが、それは西洋の音楽で用いる全音や半音とは異なる音程が使われているからです。



また、バリのガムランでは、同一の鍵板楽器類を二つずつ、常に一対にして用いますが、一方は高めに、一方は低めに調律して、音高をわずかにずらしてあります。そのため、同じ音高を同時に鳴らしたときに、強力なうねりが生まれます。この音の波を生み出す特殊な調律の仕方は、前述のバリの人たちの信仰と関係しています。この強力なうねりが生み出された空間こそ、人間界と霊界という二つの世界を感じ合うことのできる場で、神々への奉納が可能となるのです。

**(イ) 基本旋律と基本旋律を装飾する旋律**

ガムランの旋律を担当する楽器類には、主に基本旋律を演奏する楽器と、基本旋律を様々なかたちで装飾する楽器があります。基本旋律は4拍単位で、ウガルのような、グンデル属の中でも、音域は低く、音色は柔らかくて、余韻の長い楽器によって奏でられます。そのため、基本旋律は大編成の中でも隅々までよく響き渡ります。

一方、基本旋律を装飾した旋律を演奏するのは、

ボナン属や高音域のサロン属などです。細かいリズムに分割して変奏したり、基本旋律の骨格の音のみを演奏したりします。

さらに、繊細な装飾的な旋律を即興で演奏する楽器などが入ることもあります。

基本旋律は伸び縮みする拍を伴うことがあります。ガムランの音は数字で記されますが、例えば、「2 3 2 1」という4拍の基本旋律があるとします。この基本旋律は曲が進むと、「・2・3・2・1」と8拍かけて演奏されたり、「・・・2・・・3・・・2・・・1」と16拍かけて演奏されたりします。この基本旋律の伸び縮みを表にすると、次のようになります。

拍	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
A	2	3	2	1	2	3	2	1	2	3	2	1	2	3	2	1	2
B	2	・	3	・	2	・	1	・	2	・	3	・	2	・	1	・	2
C	2	・	・	・	3	・	・	・	2	・	・	・	1	・	・	・	2

Aは拍が伸びる前の「2 3 2 1」という4拍の基本旋律  
 Bは拍が伸びて8拍かけて基本旋律が演奏されたもの  
 Cはさらに拍が伸びて16拍かけて基本旋律が演奏されたもの

拍が伸びて基本旋律が演奏されるようになると、基本旋律を構成する音と音の間に隙間が生まれます。様々な装飾楽器は、この隙間を埋めるように装飾を加えていきます。

**(ウ) 一つの旋律を二人で分担して演奏する奏法**

バリのガムランでは、コテカンと呼ばれる奏法が用いられます。これは、あるフレーズを一人で演奏せずに、二人で分担してかみ合わせて演奏するものです。コテカンは「入れ子」になった一対の音型で、主にボナン属や鍵板楽器類の演奏に用いられます。



このコテカンは、装飾された旋律のリズムが細かくなったり、曲の速度が速くなってきたりすると用いられます。鍵板楽器は右手でパチを持って鍵板を叩くのと同時に、左手でその前に叩いた鍵板の響きを止めながら演奏するのですが、そういった奏法が一人では物理的に非常に難しくなるからです。そして、この独特の奏法には、強力なうねりをあえて生み出す調律からもうかがえるバリの二元的な世界観（天と地、浄と不浄、善霊と悪霊など）や、対立する二者が補い合うというバリの共存概念も潜在しています。

### (3) わくわくしながら聴くこと

ガムランを見たり聴いたりした子どもたちは、痛快な響きのする数々の青銅打楽器が止むことなく叩かれ続けていることで生まれる迫力に圧倒されるでしょう。その一方で、その演奏を秩序のないものだととらえて、わけがわからないと感じたり、にぎやかで騒がしいだけと感じたりする子どももいるかもしれません。しかし、そういった感受は、ガムランならではの音の重なりによるものでしょう。

音の重なり方やその変化に注目して聴くことで、ガムランの醍醐味に迫ることができます。重なりの中に、痛快な響きの音色だけでなく、うねるように響き渡っている音色があることや、リズムの細かい旋律だけでなく、ゆったりとしたリズムの旋律があることを知覚すると、ガムランをもっと楽しむことができるでしょう。また、痛快な響きの音色で奏でられている楽器が重なりから消えることで突如生まれる静寂の中に、うねるような響きがあることを知覚したとき、私たちはそこに何かぐっと引き込まれるような特別な感情を抱くでしょう。

はじめて聴いた時には気づかなかった一面を知覚すると、子どもたちは新たな発見にわくわくするでしょう。また、ガムランを聴くと、普段の生活でよく耳にする音楽との違いから、ガムランならではの音楽的な特徴を漠然と感じ取るでしょうが、ガムランの楽器の音色やリズム、旋律、楽曲の中での役割分担などがどのようなものであるかを確かに知覚し、その特徴がインドネシアの人たちに息づく信仰や慣習と密接に結びついていることを知ることは、さらなるわくわくを生み出すでしょう。鑑賞の合間に、実際に使われている楽器やリズム構造を奏でてガムランの音楽構造を体感することは、その音楽のおもしろさをより深く味わって鑑賞する姿につながり、わくわくは止まりません。

耳を澄ませて主体的に鑑賞する姿や、音楽のよさやおもしろさを感じ取る心を引き出し、子どもたちが様々な音楽の多様性やよさを尊重し楽しむ人になってほしいと願っています。



### (4) 身近なものを楽器にしてガムランをつくること

本題材では、このようなガムランの鑑賞活動を、オリジナルのガムラン風打楽器合奏の創作に発展させます。ガムランの音楽構造を体感する際には、身のまわりのものを楽器に見立ててリズムを叩く活動をします。また、繰り返されるリズム構造や、伸び縮みする基本旋律、楽器ごとの役割の違いなどを体感する際に、視聴する曲を簡略化したパターンで体感します。

しかし、これらのことは、身のまわりのものが楽器になり得ることや、仕組みを参考にパターンを変えれば様々な音楽表現をつくりあげることができることを物語っていて、これはまさに音楽の世界を広げるチャンスです。

身のまわりのものを楽器に見立てるためには、音を鳴らして音色を聴き、吟味する必要があります。金属製のボウル一つとっても、様々な鳴らし方があります。叩くものや叩く場所、置く場所、持ち方が変わるだけで音色は変わります。また、ボウルの中に水を入れて、揺らしながら底を叩くといったように、奏法でも音色は変わります。ガムランの青銅打楽器のような響きのものはなかなか見つからないでしょうが、それでも音の持続が長いものや短いもの、響きの澄んだものや鈍いものなどといった音色の違いを見つけ、子どもたちは見つけた音色に自らの感性で音楽的な価値づけをしていくでしょう。また、音の高さの違いに気づき、身のまわりにあるもので音階をつくり出す子どももいるかもしれません。

それらを音素材として、ガムランを参考につくったリズム構造に見つけた音色を当てはめれば、拍節周期ができます。基本旋律ができれば、それを變形することで装飾する旋律もつくれます。そして、それらを重ねることでガムラン風の打楽器合奏になります。重なりの中の要素を変化させたり、重ね方を変えたりすれば、全体の響きの味わいも変わってきます。そのように聴き合いながら試行錯誤することで違いを楽しみ、感じたことや意見を出し合って、みんなで音楽をつくりあげていく子どもたちの姿が見られることを楽しみにしています。

どの音楽にも当てはまりますが、音楽には重なっている全ての音に何かしら意味があり、間や休符などあえて音のない瞬間も含めて、そこには無駄な音はないように思います。音色やリズム、旋律、重なり方など、合奏をつくりあげる一つ一つの要素にそれぞれの子どもたちの発想や思い、感性が込められていくガムラン風の打楽器合奏の創作が、そのような音や音楽に対する感性を豊かにするきっかけになることを願っています。

参考文献：皆川厚一(2010)

『インドネシア芸能への招待 音楽・舞踏・演劇の世界』 東京堂出版

皆川厚一(1998)

『音楽指導ハンドブック 20 ガムランを楽しもう 音の宝島バリの音楽』 音楽之友社

柘植元一・塚田健一 編(1999)

『諸民族の伝統音楽からポップスまで はじめての世界音楽』 音楽之友社

野村誠(2010)

『授業がもっと楽しくなる 音楽づくりのヒント 作曲なんてへっちゃらだー！』 音楽之友社

坪能克裕・坪能由紀子・高須一・熊木眞見子・中島寿・高倉弘光・駒久美子・味府美香(2009)

『鑑賞の授業づくりアイデア集 へ～そ～なの！音楽の仕組み』 音楽之友社

### 3 学習指導要領との関連

- A 表現 (3) 創作** ア 言葉や音階などの特徴を生かし、表現を工夫して旋律をつくること。  
イ 表現したいイメージをもち、音素材の特徴を生かし、反復、変化、対照などの構成や全体のまとまりを工夫しながら音楽をつくること。
- B 鑑賞 (1) 鑑賞** ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。  
ウ 我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴から音楽の多様性を理解して、鑑賞すること。

〔共通事項〕で扱う「音楽を形づくっている要素」に関する本題材における指導内容

音色	ガムランに用いられる楽器の音色 楽器に見立てた身のまわりのものの音色
リズム	繰り返されるリズム構造 隙間を埋めるように重なるリズム かみ合わせのリズム
旋律	ガムランの五音音階による基本旋律 基本旋律を様々なかたちで装飾した旋律
テクスチャ	拍の流れの中で変化していくリズムや旋律の重なり方

### 4 授業実践

#### (1) ボウルの音色とガムランの音色

叩く場所やバチとなるものなどを変えて授業者がボウルを叩いて鳴らした異なる音色を、「何を使って」「どのように」奏でられているかは見ないで聴き比べるところから、子どもたちの学習はスタートしました。授業者は子どもたちに、どのような音色で、どのような感じがしたかについて、後ほど尋ねることを伝え、以下の3パターンの奏で方で音色を提示しました。

- 【A】** …大きなステンレス製のボウルの底を指の先で支えて持ち、その中を毛糸で巻かれたマレットで叩く
- 【B】** …Aと同じボウルをひっくり返して机の上に置き、その底をナイロン製のフライ返し先端で叩く
- 【C】** …取っ手のついたステンレス製のボウルの中に少しばかりの水を入れ、取っ手を持った状態でボウルの底を固いマレットで叩き、叩いた後にボウルを傾ける

授業者はそれぞれの音色の違いを、擬音や雰囲気、イメージなどを踏まえて、気づいたことや感じたことを述べるよう促しました。子どもたちは耳を澄ませて音色を聴き比べ、以下のような考えを伝え合いました。

#### 【A】の音色について

- ・ボーン ・ゴーン ・響きがある ・余韻
- ・落ち着く感じ ・癒される ・しみじみする
- ・安らぐ ・除夜の鐘 ・仏教っぽい など

#### 【B】の音色について

- ・カンッ ・鋭い感じ ・甲高い ・音が短い
- ・痛々しい ・きつい感じ ・スカッとする など

#### 【C】の音色について

- ・ほにゃーん ・へによーん ・まぬけな感じ
- ・おぼけが出てきそう など

その後、授業者は実際に「何を使って」「どのように」音を奏でていたか、子どもたちに見えるよ

うにして3パターンの音色を再現しました。子どもたちも同じように試してみましたが、聴いた音色と同じ音色を奏でることができず、子どもたちは苦戦していました。子どもたちは、持ち方や叩く場所を変えることで音色が変わることに気づいたようでした。

それぞれの音の鳴らし方と感受したそれぞれの音色の特質や雰囲気仲間と共有したところで、授業者は子どもたちにバリのガムラン『スカール・ジュブン』（5分40秒ほど）を、ガムランであることは伝えずに、3分ほど聴かせます。子どもたちは、どのような音色が音の重なりの中にあるのか、耳を澄ませて鑑賞しました。その後、授業者は様々な大きさのボウルと様々なバチとなるものを用意してあることを子どもたちに伝え、「聴いた音楽の中に登場した音色に似た音色を探そう」となげかけました。子どもたちはボウルやマレットなどを自由に手に取り、響きの短い音を中心に、ひたすらに音を鳴らし始めました。

しばらくして、授業者は子どもたちに「映像を見ながら先ほどの音楽を聴いてみよう」となげかけました。DVDの映像に登場していたのはボウルではなく、見たことのない楽器が様々な奏法で演奏されており、子どもたちは映像に釘付けになっていました。授業者は子どもたちにこの音楽がガムランと呼ばれるインドネシアの伝統的な音楽であることを伝え、「ボウルでも似たような音楽を作れないだろうか」となげかけました。そして、ボウルを使ってガムラン風のオリジナル打楽器合奏をつくっていくことを伝え、授業を終えました。

### 子どもたちの「追求の記録」より

#### 【ボウルで奏でられる音色について】

- ・先生がやったのを、何の音なのか答えを教えてもらった時、すごく驚いた。色々な大きさのボウルだけで10種類くらい音が出たので、家でもやってみたい
- ・音のクイズを出していた時、ただのボウルなのに様々な高さ、音の長さ、響きに変化が出たのはおもしろいと思った
- ・ボウルの大きさで音が全く違う。ボウルが大きくなるにつれて音が低くなっていった
- ・同じものでも叩くところを変えると音が変わった。また、手で広いところを覆うと音が低く響かなくなった
- ・物の持ち方、強さ、向き、打ち方で音がすごく変わった。音がわかるもの（ファとかソとか）があり、つなげたらメロディになりそう

#### 【視聴したガムランについて】

- ・でたらめにたたいているようにも見えるけど、みんなが呼吸を合わせてリズムで叩いていておもしろいしすごいと思った
- ・ビデオで見たようなリズムのあるきれいな音を出さないと、今日みたいに耳が辛くなるから、そういう音を探してみたい
- ・合奏なので、ただ音を鳴らしているだけなのは違うと思うから、音の組み合わせに気をつけないといけないと思う
- ・色々なものを工夫して音を出せるようにするのはおもしろそうだった。多分あの民族の音楽は神に関係するものだと思う

など

以上のように、「追求の記録」には、音色や音程、リズム、テクスチャなど音楽を形づくっている要素に関する記述が見られました。

### (2) ガムラン風にするために大切なこと

ガムラン風の打楽器合奏をつくりあげるためには、ガムラン風にするために大切なことを確認する必要があります。子どもたちは、ガムランに登場する音色に注目しながら、前時に鑑賞したバリのガムラン『スカール・ジュブン』を再び視聴しました。

その後、自由にボウルや叩くものを手に取って、ガムランに登場した音色に近い音色探しを再開します。

しばらくして、授業者はガムラン風にしていくために大切なことを全体で共有していく場を設けました。子どもたちは、それぞれが思った音色に関する考察を伝え合いました。響きの短い音についての考えが多い中、響きの長い音について触れる子どももおり、音色に関する子どもたちのイメージが深まっていきました。また、一人の子どもが音色を紹介した後に、その音色に似た音色を他の複数の人が同時に鳴らすことで、ガムランに近づいたかを確認し合っていくことを繰り返していきました。すると、子どもたちから、ガムラン風にするための大切なことについて、音色についてさらに深くせまるような発言や、音色以外の音楽的要素についての発言も聞かれました。

- ・一種類の音色だけではガムランにはならない
- ・似たような音色同士を重ねてみてはどうか
- ・音の高さの近いもの同士を重ねてみてはどうか
- ・響きの短い音よりも長い音の方が大切だと思う

- ・ただでたらめに鳴らしているだけではだめ、リズムをつける必要がある
- ・「カンカンッカカン」とか「テテンテテンテ」とか「ダー——ーン、カッ」とか……

など

音色以外の要素にも発言が広がっていったところで、授業者は「今日の授業は耳をふさぎたくないような音色で溢れていたのだけれど、視聴したガムランに登場したのはそのような音色だっただろうか」と、音色に立ち返る質問をなげかけました。子どもたちは、そうではなかったという反応を示しました。そして、授業者は「響きの短い音も響きの長い音もガムランには重なっているし、リズムも大切になってくるけれど、DVDの音楽のように心地よい音色であることが何よりも大切なのではないか」となげかけました。さらに、ガムランの重なりの中には、欠かすことのできない音楽的な要素がもう一つあることを伝え、授業を終えました。

#### 子どもたちの「追求の記録」より

- ・僕はガムラン風は、軽く高い音がたくさん重なっていると思う。途中で低いボーンという音も混ざっていた
- ・ガムラン風にするためには、音の響きと伸びが大切だと思う。お寺の鐘みたいに響くボーンという音がガムランには必要だと思う
- ・ボウルは音の高さが大きいものの方が低くて、小さい方が高いから、順番に並べればドレミファソラシドみたいに音階ができると思った
- ・ガムラン風にするには、重なりとか音の強弱も大事だろうけど、僕はメロディをはっきりさせて、そのメロディに対して一番いい飾りの音をつけることが大切だと思った
- ・私が叩いているとうるさくて聴きたくない感じだけど、DVDの人たちの演奏は聴いていてもうるさくないし、むしろ聴いていたいという感じがした。音は固くなくやわらかい感じだ
- ・ガムラン風の音色がつかめた気がした。先生の言った「心地よい音色」に共感できた。自分がつくり出す音色はまだ不愉快なものが多いから、響きやリズムを意識してつくりたい
- ・ガムランの音は重い音と軽い音が響いて重なり合うのがいいと思う。余韻が頭にすんなりと入るというのを目指してやっていきたい。叩き方を工夫して重くしっかりとした音を出したい

など

次時では、最初に前時に共有したガムラン風にするために大切なことを確認した後、授業者は子どもたちに、バリのガムランが神様にお供えをするための音楽、儀式の音楽であることを伝えました。さらに、うねるような音響空間の中でこそ、神様と通じ合うことができるという意図があることを伝え、響きの長い音こそがガムランをガムランたらしめていること、響きの短い音は飾りの音であることを子どもたちに伝えました。そして、再びバリのガムラン『スカール・ジュブン』を視聴して、ガムラン風にするために大切なことを感じ取っていきました。

DVDの音楽を鑑賞している途中で、授業者はある部分を過ぎたところで映像を止め、「今のところにもう一つの欠かすことのできない要素が含まれている」と子どもたちに伝え、少し巻き戻しました。そして、子どもたちは再び同じ部分を鑑賞しました。授業者が音の重なりの中にある旋律を演奏に合わせて口ずさむと、子どもたちはゆったりとした旋律が繰り返して流れていることに気づき、「あやしい感じがする」「不気味だ」などつぶやき、ガムランの新たな一面に気づいて驚いていました。そして、ガムランには旋律があることを確認しました。さらに、旋律をつくるためには音階が必要であることを押さえ、授業者が実際にボウルを音の高さ順に並べ替えて音階をつくり、旋律の一例を紹介しました。

その後、授業者は子どもたちに5人組を組むよう促し、うねるような音響空間を生み出し続けるための拍節周期とガムランの音階について紹介したプリントを配付し、ガムラン風にするために大切なことを確認し合う時間を取りました。子どもたちのうねるような響きを探す姿や、音階をつくり出す姿、拍節周期に挑戦する姿など、ガムランにせまっていく姿が見られました。授業の最後には、次回からグループごとにガムラン風の打楽器合奏づくりに取り組んでいくことを伝え、授業を終えました。

#### 子どもたちの「追求の記録」より

- ・ビデオを何回も見てみると、だんだん雰囲気かわかってきて、同じリズムのところがあったり、色々な音やリズムが重なったりしているのがおもしろいし、きれいだと思った
- ・ガムランは神様への響く音なのだというのを知り、ベースの響く音はとても重要だなと思いました。大きめのボウルを指3本で持って内側を叩くと響く音が出たので、次回意識したい



- ・ガムランは明るい感じだと思っていたから、あやしげなところがあって驚いた。神様と交信していたから不思議な感じなのと思った
- ・ガムランで一番ぼーっとしてそうな人が一番重要だからびびった。毎回同じ周期で叩かなきゃいけないからできるかわからない
- ・激しい音がガムランでは目立つけど、実はボン……という響きや旋律があることがわかった。リズムと旋律の両方の重なり合いが心地よい音色の原点ではないか。ボウルだけでもガムランにぐっと近づけることができるから頑張りたい
- ・プリントにあったように、ボウル5個で、一番大きいのが1/16で叩いて、その次に大きいのが1/8で、次が1/4で……と叩いたら、ボウルの大きさによる音の伸びの重なりを感じた

など

### (3) グループでガムラン風の音楽づくり

授業者は、子どもたちに今日から3時間かけて5人グループでガムラン風の音楽をつくっていくことを伝え、その際の条件も提示しました。

#### ガムラン風の打楽器合奏 音楽をつくるときの条件

- ① 曲の長さの目安は1分から1分30秒
- ② 座奏（床に座って演奏する）
- ③ 全員にソロとなるような部分を入れる
- ④ 基本的に拍節周期のようなものを入れる
- ⑤ どこかしらに簡単な旋律を入れる

グループ活動に入る前に、ガムランのうねっている音響のもつ意味について再び押さえ、その雰囲気を感じ取る場面を設けました。そして、うねっている音響を生み出すために鍵となるのが条件④の拍節周期であることを伝え、前時に拍節周期に挑戦していたグループに全体の前で拍節周期を実演してもらいました。手元にある資料を確認しながら実演を聴くことで、他の子どもたちは拍節周期についてイメージをもつことができました。



その後、グループ活動に入りました。拍節周期に飾りを重ねたり、旋律を重ねたりするグループも見られるようになり、ガムラン風の音楽に近づいてくるグループも早速現れるなど、子どもたちの意欲的に取り組む姿が見られました。あるグループからは「曲の流れをメモしたいからホワイトボードを用意して欲しい」という要望が出ました。次回は、ホワイトボードを使用しながら、音楽をつくっていくことを確認し、授業を終えました。



#### 子どもたちの「追求の記録」より

- ・あえて不安定な音を用いることで、ガムランの少し謎な感じが出る気がする
  - ・今日はグループでリズムとか（拍節周期）をつくった。軸となるテンポを考えて、そこに少しずつ加えていった。僕は4、8、12、16拍目に高めの音を出した。割といい感じになったので、そこから改良していきたい
  - ・拍節周期をグループでやった。音の高さや音の響きを聴いて、同じ音ではなく4人みんなが違う音で違うリズムで一度演奏をしてみた。少しガムランっぽく聴こえたけど、まだ旋律ができてなくて曲には聴こえないから、しっかりと綺麗な音で綺麗なリズムで演奏したい
  - ・ビデオをみたとき、細かくテンポを刻んでいる音があった。固いもので小さいボウルを叩けばいいのかなと思った
  - ・私はドローン担当で、神への思いをささげる大切なパートなので、拍をずらさないように気をつける。また、ずっと1分同じではなく、区切りを節に音を変えて、ガムラン風に近づける
  - ・大きいボウルを鳴らしている間にいろいろな響く音を加え、それに響かない音も加えて、短いガムランをつくれた。心地よい音色にするのはボウルだけでは難しいけど、音の変化、音階をつくりながら、一つのガムランを完成させたい
- など

次時では、5つの条件を確認した後に、静岡大学よりお借りした実際にガムランで用いられる楽器（鍵盤楽器類よりガンサ・プマデとガンサ・カンティラン、小型のシンバルであるチェン・チェン）を紹介しました。音楽教科係に実際に楽器を演奏してもらいながら、子どもたちと音色や奏法を体感していきました。ようすを見ている子どもたちは、音色を聴いて音がうねっているのを手で表現したり、余韻をじっくりと感じ取ったりしていました。さらに、授業者も加わりながら響きをとめながら演奏する奏法を紹介したり、微妙な音程のずれについて気づきを促したりしました。

実際にガムランに用いられる楽器を演奏したり音色を聴いたりしたところで、授業者は再びバリのガムランを鑑賞することを提案し、全体で映像を見ながら鑑賞しました。授業者はところどころで、「ここはまだ前奏だよ」「ここから拍節周期がわかりやすいよ」「耳を澄ますと聴こえてくる繰り返し流れている旋律があったね」「音のない瞬間もあるよ」などと声をかけたり、演奏に合わせて旋律やリズムを口ずさんだりしました。子どもたちは授業者の声かけにうなずいたり、足を揺らしながらリズムをとったりして、耳を澄ませて集中して映像を視聴しました。



その後、グループに分かれて創作活動の続きに取りかかり始めました。その際に、授業者から「1分程度の曲の形をまず作ってみよう」「曲の流れをメモしていこう」とアドバイスをしました。

グループでの創作活動では、子どもたちから以下のような音色や構成などについて仲間同士で吟味しながら創作していく姿が見られました。

- ・グループみんなで音色の違いを聴き合って、ボウルの種類やマレットを選ぶ姿
- ・いくつかの異なるボウルを同時にならして響きの違いを感じ取る姿
- ・ボウルをタオルの上に置いてから叩き、音色や響きの変化を試す姿

- ・ゴンアグン、クンプル、クノン、クトッで役割分担し、16拍周期の拍節周期に挑戦する姿
- ・異なる速度で拍節周期を奏でて比較してみる姿
- ・最初の周期については音の重なりを最小限にすることを提案するといったような、曲のはじまり方について検討する姿
- ・底の浅いボウルを底が床に接するようにいくつか床に並べ、両手それぞれに逆さまに持った大きさの小さなボウルを持ち、チェン・チェンに見立てて細かなリズムで叩いてみる姿
- ・ボウルを大きさ順に並べて、音の高さの違いを比較する姿
- ・叩くと音の高さが異なるいくつかのボウルを逆さまに床に並べ、一つのボウルを一つの鍵盤に見立てて細かなリズムの旋律を適当につくってみる姿

など

グループ活動では、創作に行き詰まっているグループもありましたが、中には拍節周期が明確であり、音階を生みだし旋律をつくり、飾りの音のリズムも変化に富んでいる合奏をつくりあげつつあるグループもありました。

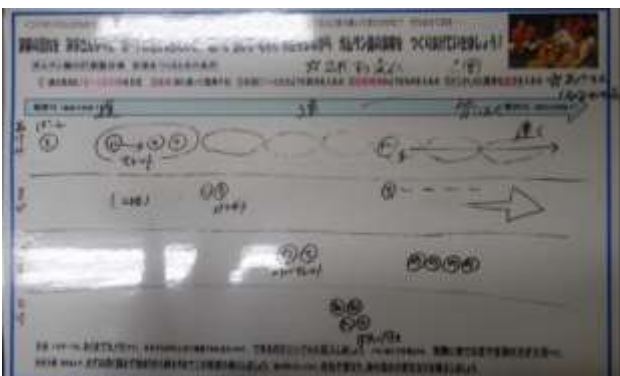
授業の最後では、全体で集まってあるグループの演奏を聴く時間を設けました。曲の構成が練り切れていなかったため、終わり方が揃わないような表れもありましたが、披露したグループはなんとか演奏し切りました。演奏を聴いた子どもたちからは、「すごい」「さすが」など、素直に感嘆の声を上げる姿が見られました。そして、子どもたちに次回が創作のまとめであることを伝え、この日は授業を終えました。

#### 子どもたちの「追求の記録」より

- ・今日はグループでリズムとかを作った。軸となるテンポを考えて、そこに少しずつ加えていった。僕は4の倍数拍に高めの音を出した。いい感じになったので、そこから改良していきたい
- ・とりあえず拍節周期を作り、即興で飾りを重ねてみた。割と良いガムラン風の合奏ができた。良かったことはメモして良い合奏にしたい
- ・それぞれの担当で旋律や飾りなどをつくって合わせたら、神様が一瞬にして逃げていきそうな暗〜い音楽になってしまった。もう少し明るくしたい。ソロをどうやって入れるかが難しい
- ・少しずつ形になってきた。拍節周期はぴったり合うように練習が必要。旋律隊や飾りがもっといろいろやると、もっとガムラン風になりそう

- ・アドリブでもいい音のでるので、拍節周期とマッチするようにリズムを工夫することによって完成度が高くなると思う
- ・拍節周期や旋律など役割を分けて活動した。曲作りは拍節周期を強く意識しようと思う。また、終わりは響くほうがいいと思った。授業の最後に披露した人たちの演奏の中で、それぞれが違うリズムなのに一定のところで揃うところがいいと思ったから、取り入れていきたいなど

創作活動の最終回では、他の学級の演奏会の様子を映像で紹介したり、拍節周期を一人で演奏する方法を紹介してもらったりしてから、創作活動に取りかかりました。他の学級の演奏や他者のアイデアに触れた子どもたちは、ボウルでも素晴らしい音楽をつくり出せるという可能性をさらに感じ取り、張り切って創作活動に取り組みました。授業の終わりに、授業者は次回が演奏会であること、演奏会の前に最終打ち合わせの時間をとること、ガムランは即興的な要素も含まれておりおおまかな構成や演奏の変化の節目を決めていけば即興でも演奏になることを子どもたちに伝えました。



#### (4) ガムラン風オリジナル合奏の演奏会

15分程の最終打ち合わせのあと、子どもたちはガムラン風のオリジナル合奏の演奏会を開催しました。演奏会では、演奏を始める前に奏者が一人ずつ合奏の中で自分の担当する役割と奏でる音色の紹介を行いました。音色や旋律、拍の流れなど、音楽を形づくっている様々な要素それぞれの違いについてはまだ正確に理解し切れていない子どももいましたが、自分なりの言葉で自分の担当する役割や奏でる音色の特徴を紹介する姿が見られました。また、演奏披露の際には、全員で同じ拍の流れに乗って、自らが生み出した音色や間、余韻、リズム、旋律などを大切にしながら仲間の音を聴き合って演奏する姿や、耳を澄ませて他のグルー

プの演奏を聴き、「すごい!」「おもしろい!」と思わず感嘆の声を上げる姿が見られました。また、演奏を披露する子どもたちからは、次のような姿が見られました。

- ・拍節周期の区切りとなる音を最も大きなボウルの内側を鳴らして毛糸で巻かれたマレットを手首にスナップをきかせて叩きボーンという音色を大切に響かせる姿
- ・叩くとポンポンと長さの短い音が出るようにボウルを淵側が床に接するように置き、拍を刻み続けてクンダンの役割を担う姿
- ・8拍周期におさまるように「ダンダカダンダカダカダンダン」「ダーンドンゴーオーオーン」などリズムを工夫して旋律や飾りを奏でる姿（なお、「」内は16文字になっているが、それは一文字を半拍として表記したため）
- ・一人ずつ奏法が工夫された異なった音色を考案し、誰が何拍目に入るかを打ち合わせして決めておき、間をつくり一人一人の音色の余韻を味わえるようにしながら順に音を奏でていく姿
- ・8拍周期で、毎回周期の後半で4拍の短い旋律をパターンを変えながら響きの長さの短い音で奏でる姿
- ・一人一人が奏法やリズムを工夫しながら拍節周期2周分に及ぶソロを順番に奏でていく姿など

演奏会の最後に、授業者から「自分の知っている音楽の世界をさらに広げ、様々な音楽のよさやおもしろさを見つけていくきっかけとなること」や「音のない音である間を含めた一つ一つの音色を大切にたり、様々な音色に秘められた可能性を感じ取ったりすること」を題材に込めた願いとして子どもたちに伝えました。子どもたちは授業者と共に、これまでの演奏づくりの過程と互いの音楽への気づきを賞賛し合い、授業を終えました。



鑑賞・創作・発表の一連の活動を終えて、子どもたちは題材を通しての感想を書きました。その中で見られた記述を、以下に掲載します。

- ・演奏会では、みんなの様々な発想があつて、とてもおもしろかった。ボウルで出せる音だけでも100を超える種類の音色があると思うので、もっとたくさんの音色を調べて聴きたい。本物のガムランの楽器をもっと見てみたい
- ・ガムランがインドネシアの伝統的な音楽で、神様と交信する空間を作ることが目的だと知り、とても興味深かった。この目的を考えながら創作をしたことで、自分の中の音楽のとらえが広がった。日本や他の国の伝統的な民族の音楽についても、聴いたり、由来を調べたりしたい
- ・創作で、音色について話すことが新鮮だった。身のまわりにある音でもガムランに登場する音のようなすてきな音色が響くことがおもしろくて、様々な音色を出すことに興味をもった
- ・最初はガムランに全く興味をもてなかったし、ガムラン風の合奏をつくるのも嫌だったが、創作していくうちに自然とアイデアや改善したい思いが生まれ、少しずつ楽しくなっていた。鑑賞をして、どうすれば似たような音を出せるか考え、試し、グループで合わせて変なところを修正して、一つの音楽ができたときの達成感や、叩き方や叩く場所などによる微妙な音色の違いのおもしろさも感じ取ることができた
- ・今まで音楽は適当に楽器を叩いてつくられていると思っていたが、ガムラン風の合奏の創作を通して、音楽はともしっかりとつくられていると知り驚いた。ガムランは単純だけど、工夫できるところがたくさんあり、即興も入っているので、毎回別の音楽になるところがおもしろいと思った。これから音楽を聴くときは、単なる音を並べた曲とは思わずに、しっかりと心をこめて作られたことを意識して聴きたい
- ・最初は当然音楽として完成していなくて、次第に骨組みができてくると、ただの音が音楽に近づいていって、だんだん今のものを越えたいと思うようになってきて、音楽になっていくことがとてもおもしろかったし、楽しかった
- ・そもそも楽器ではないボウルでも、拍節周期や音の役割を考えれば立派な音楽をうみだせるからすごいと思った。また、身のまわりにあるものでも曲は作れて、昔の人はそうやって音楽を生み出してきて、それが発展して今の音楽があるのではないかと思った

- ・ガムランや今回創作した合奏は、今まで自分が作ってきたジャンルの曲とは全然違って、こんなすごい曲を一つの民族が作ったのかと思うと、音楽って奥が深いなと思った。僕は、全音でも半音でもない不思議なやわらかい音にもすごく興味をもった。重ね方や伸ばし方によって曲の雰囲気が変わるから、発表のときに自分たちのボーンという音の太さ、固さなどと他の班のものを聴き比べるのが楽しかった
- ・ドレミの音階を組み合わせたものだけが音楽ではないということがわかった。ガムランはこれまで私が触れたことのない音楽で、独自の楽器を使って、独自の音階が作られていておもしろいとおもったし、世界中で様々な音楽が演奏されているとわかり、音楽に対するイメージが広がった。また、きっとガムランを演奏している人々は、「ドレミ」という概念がないと思うし、クラシックや歌謡曲は知らないと思う。それなのにそこでは音楽というものが存在しているということを知って、不思議に思えた。人間がいればそこには音楽があつて、音楽があればそこには人間が存在しているというような、切っても切り離せない関係があるような気がして、他にはどんな音楽があるのか興味をもった

など



